



卒災とGDV教育

NPO法人 GDVI
理事長 太田恵美子

1. はじめに

東日本大震災、リーマンショック・欧州債権危機による日本経済の低迷などの現状に加え、列島全体にわたる巨大地震の発生や少子高齢化の進展などによる国力衰退の懸念など、日本の未来は必ずしも安泰ではなく、むしろ危機的状況と言った方がよいだろう。このような時代で最も頼りになるのが人であり、崇高な意思と実行力をもって広く社会に貢献できる人材が今ほど必要な時はない。GDV教育は、そうした人材を育てる最も重要な基盤の一つとしての役割を担っている。卒災¹⁾という言葉は、自然に学び災害と共に生きて来た人類のあるべき姿を謙虚に直視し、それを糧として新たな未来を拓くことを意味していると思う。そのためには「考える力」を養い、人間力を増進することが不可欠であり、GDV教育の真髄はまさにこの点にある。本稿では、GDV教育の視座からみた卒災思考のひとつの側面について述べる。

2. GDV教育のながれ

この教育方法は、筆者の長年にわたる教諭生活の中で熟成し完成させたものであり、単に児童生徒の図工・美術教育に矮小化されるものではなく、すべての人々が夢と希望を抱き信念をもって地球社会に貢献し生きて行く力を養うことを目的としたもので、GDVと名付けている²⁾。すなわち、Gは(Global;地球の)、Dは(Dream;夢)、Vは(Vision;洞察・展望)であり、弊法人名の末尾にあるIは(Interaction;対話・相互作用)である。したがって、連語GDVIとする教育目標は、地球規模の「夢・志」を持って自然や人々との対話を通して人間力を養うことにある。周知の方も多いと思うが、本教育のプロセスは以下である。

- a. ネイチャーGDV (自然の生命にふれる。)
- b. ワールドGDV (このままでは地球が危ない、地球環境を守る。)
- c. カルチャーGDV (世界的遺産の1つを選び、その文化の姿・かたち・精神と対話をする。)
- d. ヒューマンGDV (歴史を創った先人の苦難の生涯や社会貢献の姿について学ぶ。)
- e. パーソナルGDV (地球社会にどう貢献するのか、自らの人生のあり方を考える。)
- f. 卒業論文 (GDVを通して学んだことを土台に自分自身の生き方を具体的に論じる。)

2.1 ネイチャーGDV

人は、自然に抱かれて暮らして来た。しかし、現在の経済優先社会では、自然が追いやられ無機的で乾いた街に多くの人たちが居住している。自然が疲弊すれば人間も生きられない。まず、自然の営み、小さな息づかいを覚知することが不可欠である。例えば、野に出てはかなく生きる草花と対話をする。

その生命の営みに語りかけ、自分が思ったこと感じたことを整理し、草の名前や植生の分布など分からないことや疑問に思うことは本などで徹底的に調べ、その結果を絵や文章で表すことによって、自分の思いや考えをまとめる。このワークを通して、自然に接しそれを守り拓げることが大切で、人類存続の基底であることに思いをはせる。ネイチャードリームビジョンをまず採り上げる理由はここにある。なお、絵を描くために必要な基礎知識などはこの段階で徹底的に教える。



「落ち葉に語りかける。」

2.2 ワールドGDV

より広く地球環境の現状について考える。死者・行方不明者が2万人におよぶ東日本大震災（2011年3月11日発生）を目の当たりにして自然の脅威を実感した人々の思いは様々である。この地震はM9という規模の巨大さ、大津波や火災の発生、原子力発電所からの放射性物質の飛散など、未曾有の複合災害として日本のみならず世界各国の人々の記憶に刻み込まれた。地震、噴火、竜巻、台風、豪雨などの自然災害を防ぐことはできないが、被害を低減する努力に休みはない。

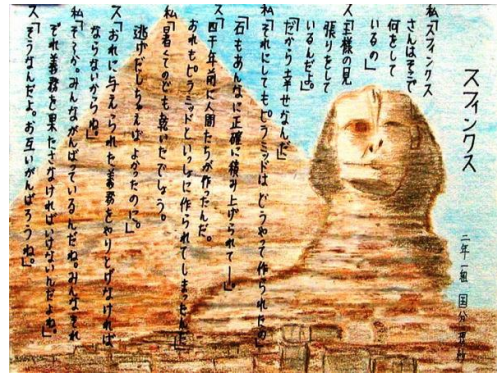
また、過度な経済活動に起因する環境の破壊も深刻化している。このワークでは、様々な環境問題を採り上げ、発生の原因・理由の他、これらをクリアーするためのハードやソフトの方法を自主的に調べ、考え抜いた解決策を一人一人がまとめ発表する。



「野生動物絶滅の危機」

2.3 カルチャーGDV

世界遺産など歴史的な芸術文化は、様々な環境条件の中であって存続して来た人類共通の貴重な財産である。それらの存続の背景を探究することは、人類存続の鍵を見付けることでもある。多くの人々の支援と資金に恵まれた遺産もあれば、訪れる人も疎(まば)らで朽ち果てそうな例もある。それぞれは固有の価値をもち地域や住む人と連理の絆で結ばれている。



「スフィンクスに語りかける」

この絆は地霊(ゲニウスロキ)とも言われ、その国や地域特有の文化の姿・かたち・精神を生みだしている。

生まれ故郷を離れ難く、忘れ難いのは、記憶に関わる

あらゆる故郷の情報が人の生命機能に刻印されているからであろう。遺産はそういった要素の中でも強いものと言える。したがって、歴史的な芸術文化を選び対話をするためには、綿密な調査研究に加えそれが存在する国・地域の特徴にもアプローチする努力が求められる。この学習を通して地球社会に貢献する自分の未来の姿も浮かんでくる。

2.4 ヒューマンGDV

自然の営みを覚知し広く環境の変遷を探究して、そこに泰然と存続する歴史的芸術文化の価値について学習を進めて行くと、そこで生きる人間の存在に関心が強まる。先人たちはどのような人生を歩んできたのか、特に歴史を創った偉人たちの熱情と苦難の生涯とはどのようなものであったか、究明したい意欲にかられる。



「マザーテレサとの対話」

同時に、身近で暮らす人々の生活観や仕事ぶりは、自分の将来に対する心構えを形成する上で重要な示唆を与えてくれる。ヒューマンドリームビジョンでは、人類の歴史に足跡を残した人物の一人を採り上げ、文献調査等でその人を研究し、その人物との深い対話を通して自分の感想や感銘を受けたことなどをスケッチブックやノートに図表や文章としてまとめる。将来への確かな道標となる人物の存在は、例え厳しい試練に直面しても強い信念でこれを克服する大きな力となる。

2.5 パーソナル GDV

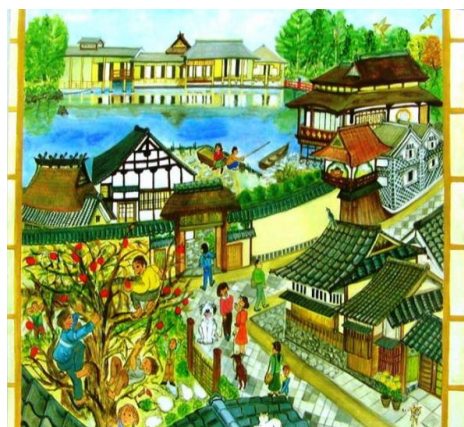
ネイチャー・ワールド・カルチャー・ヒューマン GDV の各学習を通して、地球社会の姿に関する知識を深めて行くと、自分はどうかという思いが強まり、地球社会に生きる個人として自省し研鑽したいという欲求が高まる。パーソナル GDV は、それに応える学習であり、地球社会の様々な事象を見つめ自分の人生のあり方を考える場となり、そこで自分はどのように貢献すべきか徹底して思索し、自分の将来の方向を見定めて行く。その結果を図表や文章でスケッチブックなどにまとめ発表することは、自分を探し育てるワークでもある。



「造園士」

2.6 卒業論文

前述までの 5 段階の学習結果を糧として、自分がやりたいと考える仕事を定め、地球社会に貢献する姿を思索する。その過程では、実際に働いている人にインタビューして仕事の意義や課題について話を聞き、可能であればその仕事を体験してみたりして論文にまとめる。ここで、「21 世紀に生きる私達、私はこんな仕事をして地球社会に貢献したい」というテーマ課題に関して「木の建築家になりたい」という中学 3 年生 S.T. さんの論文と絵を示す。深く学習して来ると、このような文章が書けるのに驚かされる³⁾。



「木の建築士になりたい」

----- 卒業論文の例 中 3 S.T. さん -----

中学3年間に美術の授業から学んだことは幅広い。様々な分野において、知識や自らの意見を膨らませてきた。環境、核、いじめなどの社会問題や、自分の人生から生き方まで今まで以上に目を向けるようになった。それらについて話していきたいと思う。初めにいじめは残念ながら、大人子供を問わず、今や日本の社会全体に根深くはびこっている大問題だ。

この恐怖から、自分を素直に表現することにとまどいを感じ、他人との距離感に悩み、心のいやしを求める人も増えている。社会の競争原理や、道徳観の欠如や受験偏重教育による不安の増大など原因は様々考えられようが、その解決には、精神的な豊かさ、量より質、そして結果より過程を大事にするような社会の価値観の

変革が、何より必要となってくるのではないか。人は社会的動物だ。一人では成し得ないことも、愛情や友情、協力、信頼というような精神的背景を持つことにより、強力な存在となって困難に立ち向かっていける。集団の中で輝き成長する生き物だ。しかし悲しいことに、集団には他人へのねたみが生まれる。相手の弱みにつけ込み、自尊心をずたずたに引き裂くことで、自分は優越感に浸るのがいじめだ。いじめられる不安に抗しきれずに、いじめの先制攻撃に走る人も出てくる。

しかしこの様な人間関係破綻者は、結局は「信頼」という人間の存在基盤を失い、孤立感に苛まれることになるばかりでなく、我が手で自分の人間性をおとしめていることにいつかは気付くであろう。いじめても、いじめられても心のすさみは増殖していくのである。少なくとも自分が人から受けたくないことは人にすべきではない。これを肝に命じ、僕は自らの心の弱さに打ち勝っていくつもりだ。

第2に現在、少年の非行の増加が目立つ。覚醒剤汚染、援助交際、夜遊び、恐喝、ナイフなどの凶器による事件など、その形態も多様化している。全て「ムかつく」「ウザったい」「キレル」で片付けてしまう心の貧困化も無視できない。人間らしい細やかな情緒も、倫理観も、もっと意識的に、言葉に乗せて、大切に伝える必要があるのではないだろうか。「キレル」というのは、カーッとなって判断停止となった状態だ。思考を介さない瞬間的発作(衝動行為)だ。そこを抑制し、コントロールしていくのが、言葉で考える力だと思う。

人間は「ここでやったらまずい。」「これは犯罪だ。」「相手の言い分にも一理ある。」などの言葉をきっかけにして我慢している。そして、感情のみに流されずに、合理的に考え行動することが、結果的に自分の身を守っているのだ。(「キレル」ことは、共同体のルールを切って、人と人との連続性を奪ってしまう。「お互い様」意識を持って、自分の欲望を一方通行にしない人間にならなくてはいけない。)体罰、虐待、子殺しなど、大人のキレた事件も多発している。子供は大人の鏡なのだ。

さらに今や子供の世界は、おもちゃやコンピューターの大きな市場だ。そこへ大人の、便利、快樂、至上主義が際限なく流れ込んでいることにも問題があると思う。周りを見回すと、全てがゲーム感覚であることが気になる。誰よりも速くできるスピード感や反射神経が重視され、自分の力でコツコツと、願望をかなえる努力をしたり、じっくり結果を考えた上での行動は「ダサい」と受けとられてしまう。

だから、すぐに与えられず、待たされたりすると、イライラ感は募るばかりだ。また、〇×つまり「ゲット」か「シンダ」かの価値観しかなく、その間にある微妙さを排除してしまいがちだ。気に入らない物はリセットして、他の物に取り替えてしまう。

結果を求めることが全てで、そこに至る過程や、行ったり来たり逡巡する姿は評価されにくいように思う。ゆっくり自分自身を見つめたり、心や人格を育てる努力に無関心ではいけない。たぶん人の気持ちや痛みを類推する力も、この様な視点から生まれてくるのだろうから。非行の横行は、もっとおおらかに生きるようにとの警告なのだろう。

第3に昨年、インドとパキスタンでたて続けに地下核実験が行われた。両国とも核の本当の恐ろしさを実感できないままに、憎悪の国民感情が先行しての愚行だった。核は今や地下に潜り、その強大な力は一般人には計り知れないほどに増殖している。見えない核の威力をしっかりと見定める力が要求される時代なのだ。

現在、核戦争に勝利者など無い。戦車や大砲は数の多い方に利があるが、核は既に数の多少の問題ではなくなっている。一度使用すれば全てが放射能のちりと化するのだから。人類は、地球を何十回も破壊できる程の核を作ってしまった。しかし、そこに住む人間達の生は一回きりなのである。この様に無意味な兵器をなぜ人は、我先にと作り続けるのだろうか。「核には抑制力がある。」と核保有国は言う。

敵の核の脅威に備えるために、こちらも核を持って威嚇するというのだ。しかしこれは、保有国が、他国に責任を転嫁する言い訳にすぎない。一度武装した人間は、自意識過剰、疑心暗鬼に陥り、武力拡大に走り、更に警戒心をあおってしまう。この悪循環が米ソの冷戦であった。

核保有は、自国の安全保障どころか、自国民の生命の危険性を高めてしまうのだ。そして大国への仲間入り、科学レベルの誇示と評するのは時代錯誤も甚だしい。インド独立の父マハトマ・ガンジーは、非暴力による不服従で世界中に感銘を与えた。今こそ彼の不屈の意志の力に学んで核兵器を廃絶していくのが私達の役目だ。

最後に、今世紀人類が失ってしまった最大のもの、それは地球環境であろう。人間は自らの利便追及のために科学と技術を発達させてきたが、それと引き換えに、地球を我が物顔に痛めつけ、他の種の存続だけでなく、自分の足元さえ危うくしている。一生命体としての地道な営みを忘れてしまったかのようだ。今や人間はその責を負い、地球環境の復活に全力投球すべき時であると思う。そのために今の僕は何ができるであろうか。

僕は将来建築家になるのが夢である。それも日本古来の建築工法を生かした、ぬくもりのある息の長い木造の家を造ってみたいのだ。日本の建築は世界的にみても、木の文化の最高峰だと思っている。三内丸山や吉野ヶ里の遺跡に巨木の列柱跡などが発見されたが、そんな昔から、我々は木と取り組み、木には魂(神)が宿ると信じてきた。

それは今でも我々の潜在意識の中で受け継がれている。だからこそ、歳月を重ねた木のエネルギーから人は安らぎを与えられるのであろう。僕は現在の家屋が、精神性を失い、大量生産、大量消費の商品と化しているように思えてならない。(ハウスメーカーがデザインした均一的な欧米風住宅が立ち並ぶ街並みは、日本の風土とかけ離れたちぐはぐな印象を禁じ得ない。)30年で壊されていく建材は、有害な廃棄物となって日本列島をゴミの山にしつつある。自然を思い通りにコントロールできると信じ、建物を単なる人を収容する入れ物として見てきた時代は終わりつつあると思う。

耐久性の短いものを安く大量にその場しのぎで造るのはやめて、何十年も何百年も維持できるような家、自然を生かしきり、生かされるようなしっかりした建物を丁寧に造っていくことが大切だ。環境保護や貴重な資源の有効利用の点からも大きな前進となるだろう。

3. 卒災を考える

日本は自然災害の多い国の一つである。その一方で日本ほど温暖で風光明媚な国は他にないともいわれる⁴⁾。東日本大震災では、高田松原など多くの白砂青松と称される美しい海岸が津波で消滅した。これに対して防波堤を嵩上げして津波を跳ね返すという防災対策が強く主張されている。

防災は科学技術の力で災害を抑え込む意味合いが強い。しかし、日本人には災害と共に生きるという考えが根付いている。跡地に集落が出来、海岸には再び松が植えられ、いつしか元の暮らしが蘇(よみがえ)っている。卒災という言葉を示している東京理科大学大学院教授菅原進一氏によれば、「卒」は「終わり・完了」を意味する言葉であるが、卒業式の英語表現は、「commencement」で「開始、始まり」の意味もある。学生は、学校を終えるとそこで学んだ知識や考え方を、実社会に出て活かし始め、知識を知恵に変換し成長して行く⁵⁾。



「陸前高田の松原 (震災前)」

したがって卒災は、災害で破壊・消滅した処(ところ)でまた新しい生活を始められることを意味する言葉と理解している。すなわち自然や地域との対話を通して暮らしを形成する生き方が日本人だけではなく世界の人々にとってもより大切になっていると考える。最近、大きく取り上げられているサステナビリティ(sustainability)は、「人間の存続可能性」を意味しているが、これを達成する切り札は、マネタリー経済およびこれに追従する科学技術によって荒廃した自然を回復させることにある。



「高田松原の一本松 (震災で残った)」

夢と志をもって地球社会に貢献する人を育てるGDV教育の基本目標は、まさに卒災思考を深めることでもある。津波で流された住宅や商店が、再びその地で蘇(よみがえ)ることは最も安心できる復興の形である。そのためには、津波に襲われても生命が守られること、流された家や財産を軽い負担で再取得できる財政金融システムが機能していること、誰もが職を得る機会があること、一時的な移住はあっても安心して故郷に帰れること、地域コミュニティを持続させる方策があることなどが必要であり、これらは今後の卒災科学の発展に負うところが大きい。過去の災害等の教訓から学ぶためには熱意をもって深く継続的に調査研究をする必要があるが、その目的や考え方の設定、まとめ方の基本はGDV教育で満たすことが出来るかと考える。卒災思考の必要性を自然が問いかけている象徴的光景の一つが陸前高田市にある。高田松原に残った一本の松を活かす熱意が、復興が本物であることを示す好例となるだろう。

4. GDV 教育を卒災で活かす

卒災思考とGDV教育のプロセスを関連付けてみると共通点が多く、これからの社会のあり方を検討し良い成果を得るためには、両者の連携が必要である。その場合、GDV教育は卒災思考の基底を形成する役割を担っていると考える。

ネイチャードリムビジョンでは、草花や樹木と対話することを通して自然の大切さを学ぶが、卒災思考でもまず自然を維持回復することを基本条件としている。そのためには生態系の保持が重要で、人間

と動植物との共生のバランスを正して行く方策の再点検が必要である指摘している。野生動物の絶滅を防ぐ抜本的方法はまだないと言われるが、様々な理由で人間が譲歩しようとしなないことが問題であろう。自然がかけがいのないものだという認識が薄いからである。GDV 教育による調査研究でこの問題に取り組んだ生徒は、すでに深い理解をスケッチブックの記述に残している⁶⁾。

ワールドドリームビジョンでは、地球環境の破壊の現状を見詰めるに留まらず、それを食い止める方法についても様々な視点から学ぶことを目的としている。卒災では、ダメージを受けた環境を注意深く回復させるだけではなく、更にそれを拡充して行くことが不可欠であると指摘し、現在の科学技術に根差す様々な機器やシステムの開発を推奨しているが、GDV では過去の事例を調査研究しながらも、自由な発想でイメージを膨らませてよりよい環境として行く夢を提案することを求めている。現実離れの発想が思わぬ新技術に化けることもあり得るからであり、心を育てる意味もある。

カルチャーやヒューマンドリームビジョンでは、人類社会の発展に著しく寄与した世界的遺産や偉人たちと文献や可能な対象では実地調査を通して語りかけ(自分の心に問いかけ)、自分の信念を力強く貫き行動することの大切さを学ぶが、卒災活動では、サステナビリティの重要性を認識し行動することが災害を克服し地球社会を守ることになるとしている。

卒災と GDV 教育との連関を示した表は、内容の詳細な説明は省略するが、地球の自然と人間社会、そこで起る様々な災害とそれらに対する措置について整理したものである。卒災では、災害が起った後の対応が肝要であるという日本ではまだ定着していない基本的認識を災害活動に生かして行くことが大切であると指摘している。自由な発想で考える力を養う GDV 教育は、それを実効性のあるものとするために有効である。

卒災とGDV教育の連関

卒災 GDV	視点	地球		災害種別		災害対応	
		環境	社会	自然	人為	教訓	創造
ネイチャー	身近	生命	里山	消滅	損傷	死亡	長命
ワールド	世界	生態系	持続性	崩壊	公害	絶滅	再生
カルチャー	遺産	天然	人造	滅失	損害	消滅	復元
ヒューマン	偉人	保護	制度	整備	救護	故人	新生
パーソナル	自省	回復	改善	修復	支援	無為	意志
貢献	自己	田園	都市	(農業)	(工業)	放置	先導

GDV E. Ota & TUS S. Sugahara

5. おわりに

今、人類は自らの傲慢さで自身が破滅の危機に瀕している。世の中の変遷には上り坂や下り坂があり、この生活思考の波形だけに依存しては危機から脱出できる可能性は少ないとも思われるが、GDV 教育は信念と熱意をもって地球社会に貢献する人材の育成が目的であり、この教育の受講者が、まさか（真坂？）と驚く成果を出し、これを深化発展させることによって人類滅亡の危機が回避される可能性も十分に期待され、卒災思考の強化にも繋がる。

諸外国では災害は起こるもので、それへの対応が大切だと考えるが、日本では災害を起こさないことに熱心で、対応に失敗すると平身低頭して済ませる傾向がある。しかし、災害と共に生きた先人は、現在よりも柔軟で自由な思考力で災害の教訓から学び暮らしに生かして来た。科学技術の急速な発展や情報の氾濫が「考える力」を減退させているとの指摘があり、GDV 教育はこの状況を打破するためにも必要不可欠であり、本教育の実施事例が増えることを切に願っている。

<参考文献>

- (1) 菅原進一「防災から卒災へ——22世紀への消防防災」
『Voice』312, 日本消防試験研究センター、2011年10、1-4頁。
- (2) 山本美芽『りんごは赤じゃない』新潮文庫、2002年。
- (3) 太田恵美子『育てればそだつ！立ちあがる15才』国土社、2000年。
- (4) 井原俊一『日本の美林』岩波新書、1997年。
- (5) 菅原進一「卒災教育の重要性」『UEJレポート』No.4、2012年10
www.uejp.jp/pdf/journal_04/r01.pdf
- (6) 太田恵美子の講義実録：NHK—ETV「文化庁長官河合隼雄と太田恵美子の対談
——いのちがけで教える」2003年；フジテレビ特ダネ「考える力を考える」2007年；朝日新聞
「あめ・はれ・くもり」シリーズ；同「先ず教師が夢をもとう」2006年9月22日；読売新聞
「夢を描くGDV教育」2007年10月7日；日経新聞「コーチングの極意は「りんごは赤じゃない」にあり」
2006年11月29日；下野新聞「日曜論壇」10回シリーズ；時事通信「夢教室」20回シリーズ、2003年等多数。

太田 恵美子（おおた・えみこ）

1940年、旧満州ハルビン生れ。女子美術大学芸術学部デザイン科卒業。専業主婦を経て36歳で南大野小学校教諭、小山中学校美術科教諭、緑が丘中学校教諭を経て、麻溝台中学校教諭を1995年退職。1995～2010年栃木市教育委員会参事。現在、NPO GDV教育 理事長、GDV教育研究会「夢塾」主幹。この間、1992年（財）日本教育研究連合会教育者賞受賞、1993年カナダ・モントリオール世界美術教育者会議参加・同州で指導作品特別巡回展、1995年ロシア女性同盟「ユネスコ設立50周年記念国際児童画コンペ」にて指導作品受賞。2003年横浜国立大学非常勤講師、同年日本女子大学教養特別講義「育てれば育つ！正しいプライドを培うGDV教育」担当、2005年同大学生涯学習講座「現代っ子たちを変えた夢と志を育む」担当、2007年サンパウロ大学等に招聘され講義・講演、全国学校図書館協議会・毎日新聞主催読書感想画中央コンクール審査委員長を歴任。